

第3回「地方創生研究会」 打合議事録

（敬称略）

日時：2020年2月21日（金） 18時から19時30分

場所：一般財団法人アーネスト育成財団内会議室

参加者：飯田グループホールディングス(株)吉池富士夫社長付（座長）、
芝浦工業大学 平田貞代准教授、石井唯行(株)ワンズディー代表取締役、
蕪塚功埼玉県秩父農林振興センター管理部担当部長、
一般財団法人アーネスト育成財団 小平和一郎専務理事、浅野昌宏理事
（欠席）西河洋一理事長、山中隆俊研究員、小坂哲平小坂建設代表取締役

議事内容

1. 打ち合わせ概要

第3回目の「地方創生研究会」を開催した。今回は、芝浦工業大学の平田貞代准教授を迎え、『学術界における地域振興・地域創生研究の動向－民俗学、社会学、建築学、地理学、経済学、医学、情報工学の視点から－』と題する講演をお願いした。地方創生に関する学術的研究の状況を聞くとともに、委員との間で活発な意見交換を行った。

2. 提出資料

- （1）『学術界における地域振興・地域創生研究の動向－民俗学、社会学、建築学、地理学、経済学、医学、情報工学の視点から－』（平田貞代）
- （2）地方創生エクスポ（幕張）関連資料（吉池富士夫）
- （3）丸亀市の地方創生のパンフ（前田光幸）
- （4）日本開発工学会「技術経営学研究会」の案内（小平和一郎）

3. 打ち合わせ概要

3.1 課題・疑問

学術界における地域振興地域創生研究の動向ということでいろいろな分野から、どのような研究がされているかを整理した。これを取り上げた意図は、実社会において「地方創成政策」に取り組む以前から、地域はどこにでもあり、地方の振興は不可欠で長らく取り組まれて話題になって来たにも関わらず、過疎化や一都市集中は未だ解消されていないからである。

学術界では、地域振興や過疎化問題について、様々な分野で研究テーマとしてとりあげられて来た。実社会でも、学術界でも、話題には常に上がっているのにもかかわらず、解決というか、改善が見られないことに疑問を持っていた。

例えば組織で新しい目標を達成する場合の実践的研究において、企業の中ではプロジェクトマネジメントとか、イノベーションマネジメントには、失敗例も成功例もある。学術界ではそういう事例を整理してフレームワークを作ったり、標準化したり、体系化したり

するということが進んでいる。

プロジェクトマネジメントの国際標準

参考資料には、プロジェクトマネジメントの国際標準の成り立ちの経過を示して示している。以前は暗黙知とか、偶然や独断で事を達成しようということで、成功と失敗を繰り返していたというような時代があった。

成功率を高めるために、体系化しなければいけないということで、例えば、アメリカの宇宙開発は、1回実施すると多大なコストがかかるため失敗することが出来ないプロジェクトは、成功確率を高めるために体系化が進んできた。そのようなことは技術だけではなく、技術マネジメントのプロセスとか、チェック項目や教訓等の情報を蓄積した上で、体系化していくことが行われている。

例えば、1990年頃にPMBOK（Project Management Body of Knowledge）という知識の体系化が出来た。各国でも、すでに似たようなマネジメント体系があり、それを統合して2000年にはISOで国際標準化が行われた。

学術界の整理は後手に回っている

このようなことは、イノベーションマネジメントなどでもあり、企業の実践情報が蓄積されて、学術界で体系化されることが起こっている。

地域振興、地方創生の分野では、どうなのかを見て行く。

企業でも地域振興とか地方創生を率先して、計画をしたり、視察に行ったりなどを行っている。ともすると学術界の整理は後手に回っていて、何十年単位で古いことをようやく体系化していくということがある。プロジェクトマネジメントの標準化でも50年かかっている。

今更、地域振興や地方創生について、学術的な整理は不要ではないかということもあるが、中には普遍的なことで、昔整理されたいことが忘れられてしまっていることがあるのではないかということで見直をした。

3.2 民俗学・文化人類学における地域振興の理論

(07:31)

民俗学・文化人類学では、地域振興についてどのような理論の展開があったかを見る。皆さんの中には、この分野に詳しい方がいらっしゃると思うので、途中でも何かあれば言って頂き、一緒にディスカッションをしたい。

地方創生と地域振興という表現は、ケースバイケースで使い分けていて、学術界では地域振興というキーワードの方が一般的である。政策を論じるときは、地方創生というキーワードを使うというように、学術界では使い分けていることが多い。本日の資料もそのように使い分けている。

(1) 互助社会論

民族学・文化人類学の中では、「・・論」というものは少なく、互助社会論というのが体系化されているので紹介する。

書籍としては、「恩田守雄（2012）『互助社会論』社会思想社」があり、2021年発行なの

で、書籍としては古くないが、内容としては「柳田邦夫」のところから整理されたものである。

体系化されている情報は、すべて日本における情報である。沖縄や東北地方等のいろいろな地域振興が、どのように行われて来たかという情報を収集した上で、整理し体系化をして「互助社会論」として構成されたものである。

海外でも、離島の文化などは、書籍に書かれていることに似ていて、人間の本質から出来ていることなので、かなり共通しているところがある。

（2）生活を維持するための主な構造

「互助社会論」は、生活を維持するための主な構造として、ユイ、テツダイ、モヤイという3つが日本の地方では言われていた。機能的には、結束するということ、援助するということ、蓄積するという3つのプロセスが無くてはならない必須なものである。

この3つがあれば、コストを掛けずに持続することが人間にはできる力があるという論理である。

< “講”について、意見交換を行ったが詳細は略した。議論の中では、“講”はモヤイではないかという意見が多かった。>

（3）持続の要因

災害があるかも知れないし、経済が変動するかも知れない等を想定して、必ず変わるものだという事を想定すると、その時にしか通用しない複雑なルールや指揮の統制などは行わなくても、基本的にできることや続けられることを必ず厳しく管理するというようなマネジメントが出来ている。

ユイとかモヤイというようなことは意外とシンプルで考えられている。

これから新しいビジネスモデルを作るときも、良いビジネスモデルはシンプルなので、新しいビジネスモデルを手本にするということはあるが、このような基本を手本にすることも良いのではないかというように感じる。

3.3 社会学における地域振興に関するキーファクター (22:02)

（1）地域振興の事例研究に基づく地域振興の成功要因

社会学では、地域振興に関してどのようなキーファクターがあるかを考えたい。

社会学では良くいわれている、リーダーがいないとダメとか、参加型にする必要があるとかはよく聞くことである。リーダーはいなければいけないといわれているが、普通のビジネスを立ち上げるとか、起業するとかに比べると地域振興で成功する例というのは、合理的でない「リーダー」の方が、地域振興が成功しているということを調べた研究¹があった。

¹ 堤研二（1995）『産業近代化とエージェント』産業地理学年鑑 41(3)17-37

もう一つは、哲学っぽい「不条理な苦痛を軽減するために、創造的苦痛を選択し我が身に引き受けるキーパーソン」というのが、必ず地域の振興には登場するというような研究²もある。これもイノベーション的で「最初に理解されなくても」ということで、イノベーションマネジメントに近いところがある。

地域振興というと、何となく後退した処からとか、小さな規模でということがあって、イノベーションマネジメントとまったく離れたところにある理論なのかと思ったが、調べている研究者のことは見て行くと意外とイノベーションマネジメントに似ているところがあるというのは面白かった。

質問（小平）：合理的でないというのは、イノベーションにも通ずることで、前例主義的な合理性を越えなければならないという意味の合理性なのか、今までの概念で合理的と考えるものを破るという意味合いがあるのか。

講師（平田）：イノベーションとは前例にとらわれずにとか、むしろ破壊をしていくというようなどころがあるが、地域振興の場合は、地域を良く知っているとか、地域独特の利点とか可能性を良く知っている人がリーダーになるということが関係していると書かれている。普通であれば非合理的なことは、時間をかけてまで行わないが、地域を愛しているからという理由で持続するということが非合理性というようなことかと思う。

3.4 経済学からみた地域振興策

(025:59)

(1) 地域振興のための事業創出

経済学からは、複数の多様な事業を創造した方が良いということと、衣食住全てを包括する事業の創成が良いというような議論が沢山ある。

地方振興には、事業創出が必要だということは、政府も明示していて、補助金を出しているから、何十年もかけて地方で新事業を創生するという取り組みが行われていたという記録は沢山ある。なかなか長続きしないということがあり、その原因が複数で多様でなかったということとか、衣食住を包括していなかったというのが、過去の失敗事例に当てはまっていると感じている。

補助金が出たから、外部の方とか自治体の方が、一つの事だけを行うというのはよくあることである。結局、持続性を考えると、地域の振興には複数の事業を立ち上げた方がよい。複数の事業があれば、それぞれの事業が上手くいかない時期とか、時間がかかるとかがあっても、それを共生させていくことができるということである。その点では、普通の新事業創設とは違う視点である。

(2) 資金の確保

補助金にのみ依存していると、補助金が無くなると資金が尽きてしまうというようなこ

² 竹内啓（1982）『偶然性と必然性』東京大学出版界、256

とがいわゆる。それはなぜかということで調べて行くと、本来なら地域の方が、力や経験を持っていなければならないが、地域の方が主体的に行って、成長させていくことを行わないからだということになる。

それを解消する方法として、地域内で株式売買をすると成功するという事例がある。株式売買ということになると、地域のそれぞれの方の可能な範囲で、資金を出し合って責任を持つことになるので、計画とか持続力を育てることが自然になされて行くと言っている研究³もある。

質問（浅野）：筒井先生の話は、現代の話なのでしょうか。

講師（平田）：報告は1999年となっているが、情報は1990年代の中国地方の成功例の情報である。

意見（小平）：補助金をもらうと、必ず規制が入る。補助金で儲けてはいけないという概念が強いから、本当は振興だと言いながら過剰に増える（＝成長する）と行政からペナルティが課せられる。結局、事業に対する規制が入ることになる。従って、補助金を貰うということに手を付けない方が良いと言われている。

意見（冨塚）：補助金というのは、いろいろな決まりが付けられるので、地元の人はこちらののだが、その通りにできない。思い通りに行かない内に時間切れになってしまうことがある。国の補助金だと、会計検査院が入って、そのチェックを受けるのが大変なので、それに触れないように、やりたいことよりも会計対策みたいになる。

講師（平田）：ディスカッションの中で出てきたが、補助金を出す省庁により観光だけとかエネルギーだけとかを行うように要請されるので、地域振興策の原理とは外れてしまう。複数の多様な事業をデコボコしながら生活に合わせてやっていくというようなこととは、かなりスタイルが違ってしまふということが、そもそも補助金だと上手くいかないというのが原因の一つではないかと考える。お金が悪い訳ではなく、地域の方の生活のペースに合った、それをミニチュアにするような感じの事業の作り方という視点は、外から出資すると無いかも知れない。

司会（吉池）：地域外の資金に依存する場合、このようにすれば良いというのは何かあるか。

講師（平田）：お金が悪い訳でなく、地域と共に大きくなっていく事業だから、多様でなければいけないとか包括的でなければいけないと視点が足りないからだと思ふ。どうすべきかということの一つのヒントとしては、例えばスキー場とかのスポットとしてのアイデアはあるが、それだけだと、そこに係る方とか周りの方だけが潤ってしまう。普通の事業創生であれば、1回ごとのプロジェクトとして終わっても良いが、地域に密着することであれば、複数のビジネスを協力してやっていくことの方が合っていると思ふ。

質問（小平）：個人的な見解であるが、行政が行うのは、その通りだと思うが、一企業の経

³ 筒井一伸（1999）『中国地方の過疎山荘における一地域振興の実態分析』人文地理 51(1)87-103

営者的立場からすると、ピンスポットで1つの事業を伸ばしていくことによって、結果的に副次的効果を持って産業振興になるのだと思う。事業家からすると、多面的でなくて、1つに対象を絞って出発するのではないか。

講師（平田）：もちろん個人（＝住民）から見たら、一人で全部をやるというのではなく、建設業界の方とか、農業の方などそれぞれ得意分野があって、持続や多様な事業を創造していくというのは、地域で複数の事業主が協力するということである。

韓国の事例などもあって、例えば教育サービスをやるとか、医療をやるとか製造をやるという方が、集まってお互い協力していくという成功事例がある。

司会（吉池）：1つの成功事例を作って、また次の成功事例を作っていくというのが企業のスタイルである。いろいろな人が集まって、あっちもこっちも一緒にやろうというのは難しい話である。

意見（小平）：地域振興という手法が、行政側の人だったら、バランスをとらなければいけないから一つだけという訳にはいかない。そういう意味での地域振興策ということでは理解できるが、経営者のための知見と知識という意味では、自分の強みを出して、それを地域に持って行くことによって、副次的な雇用の創出とか、付随した産業が出来上がる。それが大きな会社だと、子会社や協力会社もできる。

講師（平田）：皆さんの意見や経験談を教えてもらおうと、私も観点が増えて来るので、また調べてみたいと思う。やはり、納得が得られないかとは思いますが、先ほど、事業は1つ成功したら、利益でまた1つ起こすというように立ち上げていくものだということに対しては、私も調査をする前はそうのように考えていた。実際に、沖縄に滞在し、提案を試みた。ビジネスモデルを、次々と提案してきた。しかし、複数の多様な事業を創造するとか、包括するというようなことはやっていなかった。

地域の方が継続していることについては、華々しくはないが、宿泊施設をやっているが、レストランとかレジャーまで経営をすると回らないので、それは隣家にやってもらうとかの協力が上手くなされていたことを思い出した。もしかしたら、違う勝ち方が地域の事業創生にはあるのかも知れないという気もした。

3.5 社会学における地域振興に関するキーファクター (49:44)

地域振興の事例研究に基づく地域振興の失敗要因

人口が減少し、産業も衰退し、意識も衰退するという悪循環から抜け出せないということを整理した。この悪循環をどこから断ち切るのかということであるが、人口減少は止めようがなく時間がかかるものである。産業が衰退してしまったところは、技術が途絶えてしまうとか、施設が無くなってしまったりしている。悪循環を回復させるには、意識を回

復させるというところからやる必要があるとこの研究⁴では整理されている。

シンプルに考えて、どの地域も何十年も抜け出せていないというところで、大学の研究所や政府からの支援といった外部支援で、人口減少で補助金を出すから移住してくださいとかの施策を行ったりとか、専門家に立ち上げを依頼したりするようなことはするが、意識を回復させるという支援はしていない。支援をするにあたっては、意識が回復出来ないと何事も始まらないというシンプルな理論である。

質問（小平）：意識衰退とはどのようなことか。

講師（平田）：やる気がないとかというか、生活が出来ているのでこれ以上は望まないということで、振興をする気持ちがなくなってしまう状態である。外部からは、そこを支援するというものはないので、支援をする価値はあるのではないかと思う。

質問（小平）：そこは壁があるのではないか。例えば、老人が支配をしていたとすると、元々気力がないのだから、回復させることはできないのではないか。

講師（平田）：私も沖縄でやっていて、余り上手くいかなかったが、一つあるのは、私が提案をすると地域の方が反発をする。反発をするというのは意識を回復させるということになる。大体は否定をされて、説教をされて、やらせてもらえなかったりすることが続いていたということが思い出される。

次第にネゴシエーションが活発化してくるというのがある。「こういう理由で私たちは行っていない」というようなこととか、「できない理由はこのようなことだ」というように、説明をするようになって来た。その中で「自分たちはこうあるべきだ」ということをはっきり取り戻すような傾向はある。元々、私たちは、産業衰退を回復させるという支援にテコ入れをしかたった為、意識を回復させるための支援をしたつもりはなかった。意識回復に着目して、1年前からやっていれば、もしかして、今頃は産業を興してみようという芽が出ていたかも知れない。順番を間違えたという自己反省はある。

意見（小平）：それは論文になりそうな気がする。

司会（吉池）：住民の意識を回復するというのは教育をするということか。あるいは、人づくりというキーワードになるのか。今、国が行っている、町、人、仕事と平行で何をやっているかという、地方でやる課題はあるが、最初は仕事づくり、次が人をつくる、そして町づくりだと言っている。そこは、人づくり、仕事づくり、町づくりの順番だということなのか。

講師（平田）：主体性さえ強くなってくれば、地元の強みは、地元の方が分かっているし、それぞれで得意分野があるので、遠いようで近いというものもある。良い企業は人づくりからやっていて、必ず教育から始めるということを普通にやっていると思うが、地域創生の場合は、基本をやっていない場合もありうると思う。

3.6 グローバリズムに対するアイデンティティの再設定

(56 : 16)

⁴ 1995 堤研二 産業近代化とエージェント 経済地理学年俸 41(3)17-37 を基に作成

地域振興の中で一番情報が多いのは、第二次世界大戦後から日本がどのように復興したかという研究でボリュームがある。私が調査をしたところ、体系だった論理とか思考のよなものが普遍的なものとして、内発的発展論とかメタボリズムというのがある。イノベーションとか地域創生には、メタボリズム派の考えや思想が合っているようである。

（1）メタボリズム

メタボリズムとは、丹下健三氏の山梨文化会館や菊竹清訓氏のエキスポタワーのように、華美ではないが、キュービズムより複雑で、特徴は単位を組み合わせている形状をしている。例えば山梨文化会館は、縦の柱と横の水平線で構成されるように、2つのパーツで組み合わせる設計をしている。また、エキスポタワーも多角形のものを組み合わせて作っている。これは、どのような時代の変化とか人口の変化や気候の変化があったとしても、自由に組替えられるというメッセージがある。例えば、上に階を追加したり、減らすことができるということが考えられた設計である。

このように拡大や縮退が可能な設計という機能面だけではなく、これらが建てられた時代というのは、第二次世界大戦後で、海外からの先端技術が入って来ていて、それらの技術を吸収していた時代であった。技術を吸収しているだけではなく、自分たちの独自性も作らなければいけないが、今は勝てないというジレンマから、ただ真似をするだけではなく、どのような国からも、どのような技術も吸収し、自分たちが自由に成長や縮退をさせることができる自治権を持っているということを表すための設計である。

意見（浅野）：メタボリズムというのは、生物が新陳代謝して、どんどん変わっていくというようなことをイメージしている。

講演（平田）：外国の技術は優れていて取り入れるのだが、もつと優れたものを吸収して行って、更に自治制をいうものを失わないようにするというのを考えてこのような拡充や縮退が可能な設計をした。

その思想というのは、地域振興の今まで見て来たものに通ずるものがある。この頃の日本というのは、独自性があったが、海外の技術や情報には勝てていなかった。しかし、自分たちがどのような状況にあっても、自分たちが変わりながらも生き残っていくということを考えた結果、「形」で表した。今までの伝統建築でもなく、海外の建築でもないということで、独自性を主張している。地域振興の原点はこのような思想から来ている。

世界からみると日本も地方である。日本における独自性が建築で実現した。

3.7 内発的発展論

(1:03:01)

（1）スウェーデンにおける内発的発展

最初はスウェーデンで制度がなされていた。

SDGs と同じだと思うが、経済性だけではなく、「人間にとっての物質と精神両立の充足や環境保全を重視する」「統制よりも内発や多様性を尊重し自立を重視する」と、伝統を守

るというのも大事だが経済や社会の発展というように変わっていくことも重視するということが提言された。

（2）日本における内発的發展論

日本について整理をし直すと、衣食住とか医療とか福祉、教育、文化など全体の生活に係るすべてを同時に充足するという方針をとっていて、格差を解消していくというように、一人勝ちというより、地域全体でトータルとして力を高めて行こうとするものであった。

スウェーデン以外にも、先に発達している先進国にも内発的發展というのはあったが、日本はそれを咀嚼し直したときに、技術を中心にするということが端々に言われているところが特徴かと思う。

技術経営が得意な国というのは、この辺りにつながっているのかとも思う。日本の独自性とかアイデンティティというのは、技術をベースにしているところが表れている。

3.8 地理学からみた地域振興の構造

(01:05:42)

（1）物理的中心性からの交通や宿泊施設の設計

地理的に、耕地とか川とか海とかを考えて地理学的中心性はどこかということ計測することはできて、そこから考えて交通や宿泊施設を設計していくべきだと書かれている。

例えば地域の中で、新しいビジネスを立ち上げるなどというときに、1社で全部をやる訳にはいかないということが出てくると思う。前回、インスブルックの海外のビジネスモデルで紹介した。インスブルックでは、スキーに行ったり山登りをしたりすることは、昔からツーリズムをビジネスとしてやっていた。

成功例としては、地域の方が山歩きのガイドをすとか、リフトを持っているとか、全員で協力すればするほど、ビジネスの経済効果が上がってくるという成功事例を紹介したが、そういうことと似ている感じがする。必要なものは、協力をすればするほど、経済効果が高められるということである。

（2）耕作地面積と労働力による生産能力と改善

耕地面積と労働力による生産能力と改善というのは、簡単に計算で求められる。

3.9 観光学からみた地域振興の提言

(01:07:42)

マスツーリズムとエコツーリズム

観光学から見ると、マスツーリズムに対してエコツーリズムという考え方が出た。

エコツーリズムに対する学術界の整理としては、地域振興で雇用を創出すとか、資金を獲得すとか、環境教育ということで、環境を保持するだけでなく元に立ち返り、環境をなぜこのようにしなければならないのかという環境教育から提供するようなどころも含めてエコツーリズムという定義がある。このような思想も参考になると思う。

3.10 医学からみた地域振興の焦点と医療の重点推移

(01:08:26)

日本学術会議でも、頻繁に話題になるのは、医学からみてホットな話題の一つに認知症がある。

認知症もこれからもっと増えて行くということをどのようにして措置をするかということで、認知症になる手前の軽度認知障害（MCI: Mild Cognitive Impairment）の時期と、更に前の 40 歳からというところをターゲットとして対応しなければならないというようなことがホットな話題になっている。

この問題を解決するために、地域振興の方に協力を得たいということである。

3.11 MCI 予防から始める地域包括ケアシステム (01:10:37)

自宅とか地域のコミュニティー施設などを中心に、プレクリニカルの 40 歳代の方々が社会参加できる街づくりとか、建築物の設計とかが必要になる、ということが医学会から言われている。

司会（吉池）：なぜ地域振興がプレクリニカルの方に良いとされているのか

講師（平田）：病気になっていないので医学的治療では対応できない。つまり、病気ではないので、薬とか医療療法以外で、（脳にたまる）タンパク質が蓄積しないようにするかという方法として、社会参加が良いということである。

司会（吉池）：「なぜ社会参加が良い」という結びつきが分からない。自分の好きなことに集中する、例えばプラモデル作りに集中すれば良いということにならずに、社会参加に結びつくのはなぜか。

講師（平田）：鋭い指摘である。今の指摘から調査をする必要があるが、認知症の研究は以前からされていて、認知症に罹りやすいとか、罹りにくいという統計データから、社会参加という要因と相関があるというようにいわれている。それなので、病気になる前から社会参加をしてもらうためには、地域振興の方に委ねるのが良いとされている。

質問（小平）：別な言い方をすれば、引きこもり防止ということなのでしょうか。引きこもりは早く老化するとか、痴ほう症になり易いと言われている。

講師（平田）：ご指摘のことで、データや分析の仕方が正しいのかということに気が付きました。

意見（小平）：そういう資料はあると思うので、是非教えてください。

講師（平田）：プレクリニカルが重要であって、社会要因かどうかということ、統計の取り方は違うという感じがする。そういう研究をしているものがあるかを調べてみる。医療的には、そのような研究結果はないというところがポイントかと思う。医学の前から対応するということなので、医学の研究報告の中ではデータも少ないということなのかと思う。

意見（小平）：田舎で過ごす場所を確保し、週末は田舎で過ごすなどをしていると、思考が狭まらなくなるのではないかと思う。

講師（平田）：医学以外の方が、病気になる前のどういう分析をするかということを組み立てないとなつがって来ないという盲点があるのかと思う。この研究会にこのテーマを出したのは、この研究会には建築に詳しい方がいる。住宅の施設とかコミュニティーの建築が重要かと思っているが、産総研には実験用の住宅でデータを採って調べているというデー

タはあるが、一般用の住宅でのデータはない。建築業界からこうすれば一般用の住宅からデータが蓄積できて、住人にも役立てられるというようなことを提案しないと進まないという意味で提起をした。

12. 情報工学による地域振興と持続的成長の事例 (01:17:11)

情報工学による地域振興の事例として、島根県の Ruby City Matsue というのがある。プログラミング言語の Ruby（ルビー）というのあり、これを作った方が松江にいて、そのプログラミング言語をオープンソースということで、皆で楽しんで開発して行こうということで始まった。海外や県外で利用したり、応用したりする人が徐々に増えてきて、それを使って松江市でも Ruby を使って開発をしようということになり、プログラム言語を地域振興の売り物にするということを行った。

司会（吉池）：Ruby を使うメリットは何か。

講師（平田）：オープンソースのプログラミング言語は沢山あり、Ruby だから得をすることはないが、ブランド作りとして、Ruby の創始者が松江にいるから Ruby にしようということで、町おこし的に取り組んでいる。

質問（小平）：Ruby の開発なら任せなさい。プロフェッショナルを作るということで、ものづくりとブランドを Ruby というキーワードでやっているということか。

講師（平田）：そうである。私も、どちらの言語が良く使われているかとか、得かとか、アジャイルしやすいかということは癖になっているが、そのような発想ではなく、ブランド化するという発想である。ユーザからすれば、どのような言語でも良いのだが、そこをあえて Ruby ということで発注も増えていって、地元の雇用の発注の拡大につながり、研究者も研究するために集まってくるスパイラルが出来たという事例である。地域振興というのは、伝統的なものだけではないという発想の転換が必要だ。Ruby が最先端のものではないが、成功したというのは面白い。

13. まとめ (01:20:23)

この研究会の中に、実際に地方創生や振興を実践されている方、検討をされている方、可能性を秘めている方がいて、その中で知識とか経験を組み合わせて、最適なビジネスモデルを作っていくと思うが、振り返ってみて、今日の話の中で、普遍の法則のようなものが昔もあったとか、シンプルなビジネスモデルの参考になるようなことがあればと考え、伝えたかった。

意見（小平）：Ruby（ルビー）の話は面白かった。Ruby に限らず、特化したものを産業として持ち込むと、このようなことが起こり得るということである。

講師（平田）：創始者がこの地域にいたというようなことは要らないかと思っていて、特化した専門性があることを売りにして、町起こしをするのだということで良いのかと思う。

意見（小平）：アメリカの3Mのような企業は、田舎にあって、町の柱になっている。米国では、田舎にあって世界的企業である。そういうキーワードみたいなものは、日本のこ

れからのヒントだと思う。昔の産業を興すわけではなく、一つ特化したものがあると、（地方であっても）それが柱になって優秀な人も集まってくる。

司会（吉池）：Ruby を売っているのか。

講師（平田）：Ruby は開発用言語である。Ruby を売っているというのではなく、IoT のシステムとかを受注した人が、Ruby を使って開発をするということである。

司会（吉池）：標準語で話さないで、島根弁で話す人達が、同じ方言を使い共同で良いものを作ったということとは違うのか。

講師（平田）：松江の中に Ruby で開発できる人はいなかったと思う。開発者が世界に発信したことにより、関心のある人達が集って、育って行った。創始者がいなくても、これをビジネスモデルと考えて「うちはこれで行こう」とブランド化してしまえばできる。

意見（小平）：時間が経つと職人が増えて、他は勝てないというような専門職が集まって、一つの城になる可能性はある。新しいから入り込みやすい。時代を超えた産業を作らなければならない。松江はそのためのヒントだと思う。農業はやらない。生活するには働く産業が必要である。地方でも1時間以内にショッピングモールがあったりする。

意見（萑塚）：飯田グループは、大工を育てることも行っているので、大工のトレーニングということで古民家再生ということに取り組まないのか。すると違った発想が出てくるかも知れない。

意見（小平）：古民家は、再生しても、寒くて住みにくい。若い人は、寒くて住まないのではないか。

意見（石井）：Ruby の話から、他のプログラム言語で館山市がやれば、東京にも近いということから、地域振興にならないかと感じた。

意見（平田）：農業をやりませんかと言っても集まらないかも知れないが、プログラムをやりませんかと言えば、他県から来るという可能性はある。IT は、どこにいてもつながるのだから可能性はある。松江のケースはビジネスモデルではなく、成功した事例であって、ここからどうやってビジネスモデルにするかが、この研究会のテーマでもある。

意見（小平）：『西河技術経営塾入門（高崎）講座を4月から取り組む。沼田の2代目、3代目の経営者が5名集まる。講習が進んだら、地方創生のテーマで議論して欲しい。

意見（平田）：今日の話は、調べると古い文献でかつデータも古い。地域創生は、以前から取り組まれてお金も使われているのに、このような古い論理しかないという現状を改めて確認して、今日の議論のように全部見て行ったら、即効性のあるのは最後の事例であったという議論もあり、新しい21世紀の地域創生で、「x x x 論」というのをこの研究会で作っていくのが良い。

意見（小平）：創造企業などのベースは、田舎にあった方がよい。都会はストレスが多すぎるから、例えば通勤などで神経が消耗してしまう。ソフトなどの集中する仕事は、ストレスのないところに置いた方がよいと思う。

司会（吉池）：丸亀の市の事例が紹介されている。次回は、前田さんに講演をしてもらう予定である。

意見（小平）：日本開発工学会で「技術経営学研究会」を企画している。参加して欲しい。

—以上—